

氏 名 (本 籍) <sup>き</sup>佐 <sup>とう</sup>藤 <sup>やす</sup>泰 <sup>まさ</sup>正 (埼玉県)

学 位 の 種 類 教 育 学 博 士

学 位 記 番 号 博 乙 第 110 号

学 位 授 与 年 月 日 昭 和 57 年 11 月 30 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当

審 査 研 究 科 心 身 障 害 学 研 究 科

学 位 論 文 題 目 視 覚 障 害 児 の 読 書 速 度 に 関 す る 発 達 的 研 究

主 査 筑 波 大 学 教 授 教 育 学 博 士 岡 田 明

副 査 筑 波 大 学 教 授 三 澤 義 一

副 査 筑 波 大 学 教 授 谷 村 裕

副 査 筑 波 大 学 教 授 湊 吉 正

副 査 筑 波 大 学 教 授 教 育 学 博 士 福 沢 周 亮

## 論 文 の 要 旨

本研究は視覚に障害のある盲児、弱視児の読書速度の問題をとりあげ、それがどのように発達するか、普通児とくらべてどうか、また、視力や失明年齢などどのように関係するか、また、とくに盲児の点字訓練の効果を明らかにしたものである。具体的には3部から構成されている。第1部は盲児を対象にして点字触読速度の発達を扱ったものであり、同じ研究方法を用いて、1963年と1980年の2回にわたって研究を行なった。10数年後においてどのような変化がみられるか、不変なものはなにかを明らかにした。第2部は弱視児を対象に読書速度の発達を扱ったものであり、一般に使用されている大きさの活字(12ポ)を用いた研究と拡大活字(28ポ)を用いた研究からなっている。これら2つの研究を通して弱視児の読書速度の問題にアプローチした。第3部は盲児を対象にした点字速読訓練の効果に関する研究であり、触読速度の発達を訓練実験を通して実証的に明らかにしたものである。

以下各々の研究についてのべる。

第1部、盲児の点字触読速度の発達に関する研究では、筆者が作成した点字触読力検査を1963年と1980年の2回にわたって盲学校児童生徒(小1～中3)に実施した。点字触読力検査は点字触読速度を調べるもので小学校低学年用、小学校高学年用、中学校用の3つからなっている。被験者数は、1963年の場合は21の盲学校、1290人であり、1980年の場合は53の盲学校、709名である。な

お、盲学校には一般学校からの中途編入組も含まれているのでそれらについては別に整理を行なった。テストのほかに被験者の視力、失明年齢などについて調査を行なった。

2回の研究を通じて明らかになったことはつぎのとおりである。(1)点字触読速度は小1から小4までは急速に進歩を示すが、それ以後その伸びは緩慢になる。(2)読みの正確度は小1,小2,小3と増して行くが、小3以後は90%台となり正確に読もうとする態度ができあがる。(3)点字触読速度において男女差はみられない。(4)盲児の点字触読時間は正眼児の約3倍から4倍である。なお、1980年の研究で小1において正眼児との差が小さくなっているが、これは盲学校における幼稚園教育の普及など早期教育の効果の現われと考えられる。(5)点字触読速度と視力間に関係のないことが明らかになった。(点字学習期間が等しければ、視力差は点字触読速度に影響はない。)(6)失明年齢と点字触読速度は関係がない。(点字学習期間が等しければ失明年齢は点字触読速度に影響しない。)(7)知能と点字触読速度は相関がみられ知能が高くなるにつれて点字触読速度が速くなる。(8)点字触読速度と学力との間にも相関関係がみられ、触読速度の速いものの学力がよい。(9)盲学校中途編入者についてみると、(イ)盲学校に在学している期間の長いものほど点字触読速度は速い。遅く入学したものの得点は低い。(ロ)在籍学年をはなれて、盲学校編入時の時期をもとにして、正規(小1から入学したもの)に盲学校に入学したものと比較すると、両者の間にほとんど差はみられない。(ハ)盲学校中途編入者が正規入学者の平均速度に追いつくには、小学校高学年で2年位、中学部で3年位かかる。

第2部、弱視児の読書速度に関する発達の研究では筆者が作成した読書力検査のなかから速読の部を用いて、弱視児(小1から小6まで)に実施した。第1回目の研究では、普通児用のテストをそのまま弱視児に用いた。活字の大きさは12ポイントである。第2回目は活字の大きさを拡大して(28ポイント)、テストを実施した。一般のテスト実施時間は3分であるが、弱視児の場合、これを1分毎に6分まで延長した。これは時間を延長した場合の成績をみたかったためで、第1制限時間3分ののち、1分毎に4分目、5分目にチェックをし、2倍の6分を第2制限時間として検査を終らせた。なお、テストと併行して、視力、視力欠損年齢などについても調べた。被験者は第1回目の研究では弱視学級児童43名、盲学校弱視児52名、合計95名であった。第2回目の研究では弱視学級児童85名、盲学校弱視児58名で合計143名である。2回目の研究を通して明らかになったことはつぎのとおりである。(1)小学校1年から小学6年までいずれの学年においても弱視児の読書速度は普通児よりおそい。普通児の単位時間の読字数は弱視児の1.6~1.8倍になる。読みの正確度については弱視児と普通時の間に有意な差はない。(2)読書速度の発達については、弱視児も普通児と同様に進歩することが明らかになった。正確度については小1から小6までほぼ90%の水準を維持している。(3)弱視児を視力程度に応じて0.01~0.03, 0.04~0.06, 0.07~0.09, 0.1, 0.2, 0.3の6つのグループにわけてみると、視力がよくなるにつれて読書速度は速くなる傾向がみられる。しかし、正確度は視力程度による差はみられなかった。(4)弱視児における読書速度の性差はどの視力群にもみられない。(5)弱視児における読書速度と知能の関係であるが、知能との相関は低いか、ほとんどみられなかった。弱視児の場合は読書速度が視力による影響を大きく受けるためであろう。

(6)普通のテスト用紙をそのまま用いた(12ポイント活字使用)第1回目の研究と拡大活字(28ポイント活字)を用いた第2回目の研究を比較したところ、両者の間に有意な差はみられなかった。視力別にわけて眺めても同様であった。したがって、活字の大きさが、12ポイントから28ポイントに拡大されても活字の拡大効果はみられない。問題は12ポイントより小さくした場合どうなるかが今後の課題となる。

第3部、点字速読訓練の効果に関する研究は一定期間の点字速読訓練が点字読みの速度にどのような効果をもたらすかを明らかにしたものである。速読訓練の方法として、読書練習機のような機械を利用し、時間をコントロールして行なう方法と時間をはかりながら動機づけに重点をおいて読書材料を読ませる時間測定読書などがあるが、本研究は後者の時間測定読書による方法を用いた。

具体的には小4～小6の盲児43名(実験群21名、統制群22名)を対象に4週間(正味20日間)にわたって速読訓練を行なった。実験群はプリテスト、速読訓練、ポストテスト、(統制群は、プリテスト、ポストテストのみ)の順に実験を行なった。プリテストとポストテストは速読訓練の効果をみるためのものであり、その作成にあたっては、あるストーリーを前半と後半にわけ、前半をプリテスト、後半をポストテストにし、この種のテストを二組作った。なお、プリテスト、ポストテストは文章を読ませて時間をはかるだけでなく理解をチェックするために理解テストを作った。以上のプリテスト、ポストテストのほかに、いわゆる一般の速読テストへの訓練効果をみるために、筆者が作成した点字触読力テストI型とII型を用い、前者をプリテストに、後者をポストテストに用いた。したがって、プリテストはストーリーテスト2組と点字触読テスト1組の3組である。実験群にあたえる訓練用の材料として“世界ノンフィクション10”(金の星社)から20種を選んで点訳するとともに、それぞれに理解テストを8問ずつ作成し、点字に印刷した。訓練は4週間、正味20日間である。毎回の訓練用読材料の字数は約4,000～5,000字である。速読訓練の仕方は手引を作成して行なった。結果はストーリーテストAとストーリーテストBのいずれも実験群の読速度の向上が有意にみられた。なお、速読テストでは、実験群も統制群も有意な差はみられなかった。これは訓練材料とストーリーテストA、B、との類似によるためであろう。訓練前の読速度と進歩率との関係を調べたところ読速度の進歩は、下位群、中位群、上位群の順になり、読みの速さの遅いものにとくに効果が高かった。

## 審 査 の 要 旨

本研究は多年にわたり、読書の心理及び視覚障害児の心理を研究している筆者が、盲・弱視児を対象に読書速度の問題を取りあげて研究を行なったものである。第1部では、盲児の点字触読速度の発達の研究をし、第2部では、弱視児の読書速度の発達の研究をし、それぞれ2回にわたって、同じ方法を用いて研究を行ない、時代差などをくわしく検討した。第3部の点字速読訓練の効果に関する研究では、すでに正眼者を対象に速読訓練の実験を行なった筆者がその経験をもとにさらに

工夫をこらして実験を進めた。ここに筆者の研究に対する態度の一端がうかがえる。また第1部、第2部の研究では数多くの被験者を対象に研究を行っており、この種の研究ではこのように多くの被験者を扱ったものは我国はもちろんのこと外国でもこの例が少ない。また小1から中3まで(弱視児については小1～小6)縦断的に調査したものもこれまでの視覚障害児の読みの研究ではみられなかった。このような大規模で組織的な研究を多年にわたって行なった点は高く評価できる。

しかしながら、論文の構成に若干の問題がある。また第3部の点字触読訓練では学習実験が不足している。

今後の研究に期待される面は多々あるにしても、本研究が視覚障害児の読書能力の一端を明らかにし視覚障害児教育に貴重な資料を提供し、視覚障害学の発展に貢献したとこと大である。

よって、筆者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。